

# 中世共同体の構造と変容（2）

— 伊賀国黒田荘にみる —

新井孝重

## 目次

はじめに

### 一 「荘園」共同体

1 低位な農業生産力

2 寺院大衆

3 住民結合の萌芽

小括

### 二 二重の共同体

1 住民結合の発展

2 寺僧私領・地主制

3 「土地」物権化・諸「職」売買

小括

(以上113号)

### 三 「村落」共同体

1 南北朝期の一揆体制

2 室町期の一揆

3 観念の逆転

4 「村落」と一揆の重層構造

小括

### 四 中世共同体の終焉

1 商工民・農民・「惣」

2 共同体成員の武装

3 共同体成員の傭兵化

4 大名被官と無足人

小括

むすび

(以上本号)

## 三 「村落」共同体

### 1 南北朝期の一揆体制

i

鎌倉後末期の生産力の上昇は金融の社会浸透をうながし、住民の激しい浮沈と分解をもたらした。治

安は慢性的に乱れ、盗賊武士の小戦闘、戦乱のくすぶりは、やがて鎌倉討幕戦となって爆発し、さらにその後60年におよぶ内戦（いわゆる南北朝内乱）へとつながる。南北朝の内乱期から室町・戦国にいたる時代は、歴史学の時代区分としては中世後期ということになる。この長期にわたる時代に、黒田荘の共同体はいかなる変容をとげるのだろうか。大筋からみれば「荘園」共同体の機能が衰え、ついにはその実体を失う。寺は定額の地代をとるだけの、在地から離れた「地主」となり果てる。そして「荘園」共同体の中から姿をあらわした「村落」共同体は、土豪「地侍」と「村民」の二つの階層からなる共同体（「地域」共同体といってよい）となることが予想される。

さて、かような共同体の変容は、寺が在地から切り離される過程に外ならず、その進行とともに東大寺のなかでは黒田荘関連の文書が作られなくなっていく。それでも寺の支配意欲はつづき、住民もこれに対しては時々ではあるが反応をみせることがある。このため在地の動きを伝える史料は、僅かではあるが寺に残存する。

わたしたちはその乏しい史料から、中世後期の共同体のすがたを観察しなければならない。ここではまず貞和三年（1347）の史料<sup>(26)</sup>にみえる土豪地侍の一揆体制からみることにする。この年、伊賀国は「悪党」の狼藉がはげしく、ために弱い守護代では押さえが利かなくなっていた。そこで室町幕府（将軍足利尊氏）は「勇士の名望」高い伊勢国守護仁木義長に伊賀国守護を兼務させることにした。ところがいざその段になると、近江国守護六角氏が兼務することになった。近江の六角は伊勢の仁木よりも悪党にたいしてずっと微温的であるから、六角が守護になれば実質的には伊賀国守護は停廃されたようなものだ。これは幕府が悪党による守護停廃の奸訴を許容した結果ではないのか、と寺は幕府に疑い

の念を抱いた。

このころ「悪党」ははげしい守護停廃運動を展開しており、運動資金づくりのため伊賀一国平均に棟別銭と段別銭を賦課している。集めた資金は潤沢で、将軍公方への列訴は300人におよんだという。桃井直常が伊賀国守護となって<sup>(27)</sup>、代官を入部させたときは、北伊賀の「悪党」はこれに抵抗し合戦におよんだ。守護の手先となった河合なる土豪にたいしては、守護交代の機をねらって服部一族らの一揆勢が住宅を焼き払った。また守護停廃運動にあたっては、伊賀一国のほとんどの地侍の「署」(署名)をあつめたという。土豪地侍の一揆体制は伊賀一国を、いまや圧倒的な影響のもとにおいた。このため南伊賀黒田荘の下地が、守護によって寺へ沙汰付けされたときも、黒田荘の土豪たちは当初寺の所勘に従うと請文を出しておきながら、一揆の中心地である北伊賀の様子をうかがい、けっきょくは年貢を納めず、あまつさえ数十人が守護停廃の署名に加わる始末であった。

## ii

伊賀国におきた如上の出来事からは、いくつかの大きな歴史の変化がみられる。ひとつは寺が呼ぶ「悪党」が、すでに悪党の実態から乖離していることである。すなわちこれまでの悪党は貨幣と金融による人間の浮沈と分解、流動の結果あらわれた者たちで、多くは浮動する武装民であった。だから彼らはいかなる意味でも共同体をもたない。欲望を共有する範囲で一時的に「党」を結び、盗賊戦闘に日を暮らすか、広い交通交易の世界で武装商人や傭兵となって人生を送っていた。ところが貞和三年の守護停廃に注力する「悪党」は、一国規模の共同体を一揆の形をとって創り出しているのである。おそらく黒田荘の在地武士は鎌倉時代を通じて、血族と姻族を含む集団「縁者境界」を拡大させて一揆をつくる一方、そこからこぼれ土地から浮き上がってアウトロー化した者たちを析出していた\*。やがてその一揆(土豪地侍の一揆)は北伊賀の服部氏らを中心とする、いくつかの一揆と連合し、伊賀一国の一揆体制に参加するに至っていたのである。ここには南伊賀地侍の質的な飛躍をみないわけにはいかない。すなわちこれまでは「村落」共同体の運動はつねに「荘園」共同体の内側にとどまる「荘家の一揆」に

とどまっていた。だがこの場合は完全に荘家の域をこえて他の地域の一揆につながり、一国レベルの一揆体制を構成していた。

この一揆体制には高度の政治性と組織性がある。守護停廃の政治要求にとりくみ、室町幕府と切り結んで将軍列訴までくわだてるほどの政治性をもっていた。そればかりかほんらい守護が持つ一国平均の課税(棟別銭・段別銭)権限を奪い取って、守護停廃の運動資金(共同体の財)をつくっている。また敵(守護)に通じたものに対しては、住宅焼却の制裁を加えて厳重な共同態規制をはたらかせていた。これらは一揆体制がいかに高度な質を備えていたかを示すものである。

## iii

それでは土豪地侍の共同体があらわれるまでの経緯はいかなるものであったのだろうか。そこで注目されるのが建武の動乱期に、黒田悪党が後醍醐方に与する動きをとっていたことである<sup>(28)</sup>。足利尊氏が後醍醐政権から離反して京都へ攻め上ると、東大寺衆徒は太和・伊賀の軍勢を召し具して、足利に合力する旨を申し入れている<sup>(29)</sup>。これに対して黒田悪党は楠木正成の討幕戦の段階から反鎌倉戦線の一翼となつてうごいた。さらに建武三年(1336)12月に後醍醐が吉野に遷幸すると、かれらは荘内に城郭を構え、吉野と伊勢をつなぐ南朝の交通管制権を名張の地に確立している<sup>(30)</sup>。こうした南朝と同の姿勢は暦応三年(1340)ころまで続いたようである<sup>(31)</sup>。ただし内乱期をとおして黒田悪党が一貫した党派性を維持したわけではない。とくに内乱後半になると、そのときの状況に応じてさまざまな行動をとっている。

ところで外の戦争に複雑な行動をとる名張悪党は、地元でも複雑な、一見すると矛盾した行動をとっていた。すなわち一方では寺からの分離独立の運動を強め、もう一方では寺を中心とする「荘園」共同体の中へ逃げ込もうとしているのである。後者については次の本章の3にて詳述するとして、ここでは分離独立の運動をみておく。建武二年(1335)悪党金王兵衛尉盛俊らは東大寺支配の本末関係を断ち切ろうとする黄龍山寺の住僧山伏と結託し武力で東大寺に敵対した<sup>(32)</sup>。黄龍山寺は平安時代いらい、役行者の行場と伝える修験の山であって、この土地

固有の信仰の聖地であった。悪党が黄龍山寺に与して東大寺にたいし武力敵対したのは、この聖地を東大寺から分離することが土地の独立を象徴していたからに外ならなかった。この戦いが節目となって名張の地には「地域」が生まれ、これを主導する悪党はその「地域」土着の侍、すなわち「地侍」になったのである。こうして生まれた「地域」には地侍主導の一揆体制が出現した。この「地域」自立型の一揆体制はそのまま、いつまでも続いたわけではないが、名張の歴史に画期をなすものであったことは、注目しておきたい。

＊ 悪党の内部には下司職を相伝する家父長制原理の大江氏本家筋（大江泰定）とイエをこえた兄弟・姻族のフラットな結合原理の「縁者境界」（勸俊・覚舜ら）が存在した（正安二年七月二十一日黒田荘下司大江泰定請文、東大寺文書之七、384号）。本家筋の家父長的統制に服さない「縁者境界」はその結合原理から一揆へと発展する性質をもつが、その一方で雑多な浮浪的武装民を含みこむことで盗賊の主流とならざるを得なかった。しかし「縁者境界」の核の部分は時代が下るとともに土豪地侍化して村落に定着し、一方の浮浪武装民は都市へ吸収され傭兵化していった。

## 2 室町期の一揆

### i

南北朝内乱は14世紀末に終息した。しかしその後の室町幕府体制は守護権力の力の均衡の上に成り立っていたから、政治的に不安定な状態は続き、地方の紛乱は絶えることがなかった。これに対応して名張でも地侍の一揆がしばしばみられた。この一揆のなかからは、わたしたちは住民が寺から分離しようとするのではなく、それとは反対に寺に積極的に帰服し、荘園に回帰しようとする意識を観ることになる。しかしそれは歴史の進歩の側につくことのできない「寺奴」の精神、敗北の精神として、ただちに観るわけにはいかないであろう。むしろその意識には高度に発達した住民の「政治」がみられるのである。この時期の名張地侍の一揆は永享十一年（1439）の起請文にみられる。いま全文を掲げると次のようである。

請申 東大寺八幡宮領伊賀国黒田庄年貢間事  
右、今度自守護方、被懸様々課役候間、地下難安堵候處、依寺門御計略、属無為候間、寺門御恩子々孫々、不可忘申候、仍捧請文并起請文申候上者、向後更不可申一粒未進候者也、

一、於御年貢者、毎年伍拾石分、十二月以前無懈怠、可運上申候、

一、定使給三石并在庄雑用等、伍拾石外、可沙汰申候、

一、万一天下雖動乱、或水損旱風等損亡、或路次難候、請申分、不可有未進候、

一、余方之御領年貢、加増事候時者、此庄同可加増申候、

一、若背請文面事候時、雖預如何様御沙汰候、更以不可異議申候、

一、万一地下百姓等逃散訴訟事雖在之、於御年貢者、無未進懈怠、悉可運上申候、

右条々、雖為一事、於背此請文旨輩者、奉始梵天・帝釈・四大天王・六十余州大小□□

〔以下神文略ス〕

永享十一年己未七月廿二日

注〔住力〕安部田村之分

〔13人連署略ス〕

注 坂下村之分

〔3人連署略ス〕

注 井出村之分

〔3人連署略ス〕

注 寺垣内村之分

〔5人連署略ス〕

注 秀山村之分

〔14人連署略ス〕

注 下黒田村之分

〔5人連署略ス〕

注 大屋戸村之分

〔1人署名略ス〕

注 夏焼村之分

〔5人連署略ス〕<sup>(33)</sup>

署名したのは本荘地域では8か村49名、名張郡では10か村107名におよぶ。所掲誓約の条文に「万一地下百姓等逃散訴訟事雖在之、於御年貢者、無未進懈怠、悉可運上申候」とあるところをみると、署名者たちは地下百姓と区別される階層のもの

で、その人数から推しておそらく荘園時代の荘官武士と名主級有力住民に系譜を引く地侍であったと考えられる。かれらが誓約した事項は年貢運上、定使給与、年貢加増、請文違背の罰則など多岐にわたり、その持つ意味は寺への全面屈服のようでもある。だがはたしてそうであろうか。これを考えるには、なぜこの時点にかかる誓約を寺に向かって出したのかというところから観ていくべきであろう。そこには幕府中央の政治とからむ地方の紛乱が原因していた。このころ將軍足利義教と弟の大覚寺義昭が争い、義昭は後南朝の地盤である南大和・伊賀・伊勢の山間部に逃げ込んだ。このため義昭討伐に向かう幕府守護の軍勢は、戦域内の名張に「様々課役」（陣夫・兵粮などの課役）を懸け、「地下」は「難安堵」状態になったが、寺が「御計略」を尽くした（幕府に掛け合った）結果、地元はどうやら無為に属した。かくして喜ぶ地侍は東大寺に向かって、「寺門御恩子々孫々不可忘申候」と感謝し、こぞって年貢（毎年50石分）運上とその他のことを寺に約したのであった。

## ii

この起請文は全地侍が村ごとに連署起請して作ったものである。そこには連署した者が互いに意志を固めあう、という大きな意味が存した。この意味から起請文をみると、これが一揆の性格を帯びていたとも云えるのである。地侍たちは一揆して年貢その他の地下請を実現していた。このときの名張の政治情勢からみれば、起請文にみえる寺への恭順屈服は、守護勢力が名張に侵攻するのを回避するために、地侍がとった策としてみられ、そこには敗北どころか、練磨された策略すら垣間見られるのである\*。また彼らがこうした誓約に踏みきったきっかけに、室町將軍の意志「上意」があり、名張地侍が南大和地侍（越智、箸尾、布施、吐田）を請人に立て、これに従う形式をとったことも注意する必要がある<sup>(34)</sup>。おそらく幕府（將軍足利義教）は義昭討伐にあたって、かねて鎌倉時代いらい悪党の巢窟として有名な名張の地を、敵に回したくはないという思惑がはたらいたのであろう。このために幕府は「寺門御計略」に応えたのであり、それと引き換えに名張地侍には年貢運上を寺に約束させたのである。

\* 石母田正氏は名著『中世的世界の形成』のなかで、ここでの起請文（P 3r、永享十一年起請文）をとりあげ、「平安時代以来の黒田庄民の末路を偲ぶすが」と云い、黒田悪党に軍国主義の戦時国家に屈服する日本人を思い浮かべ、「この起請文の一字一句に黒田悪党の敗北が刻まれている」と痛恨の念をもって述べられた。のち（アジア太平洋戦争敗戦後、1950年代）にこの評価は、竹内理三氏から「このとき荘民が請け負った年貢は五十石である、（中略）東大寺に屈服したにしては余りにも額が少なすぎる。さらに鎌倉時代では、黒田荘武士団が（中略）請所権の承認を得る望みさえなかった（中略）（永享十一年の起請文は）むしろ寺家にたいする（荘民の）前進を意味するのではあるまいか」との批判をうけた。石母田氏はこれをうけて、「人民のたたかいは、結果は敗北のようにみえても、それだけの成果があり、敗北の仕方もちがってくるといふ観点」が欠けており、「戦時下（アジア太平洋戦争下―新井）の自分の歴史認識の未熟」によるものであった、と述べられている。この時点での学界の論点には、この起請文の作成がいかなる中央政界の背景によるものであったのか、という観点が欠落していた。起請文のこうした背景についてはじめて注目したのは太田順三氏であったと思う（『荘園と『地域的一揆体制』』佐賀大学教養部研究紀要』第12巻、1980年）。氏の研究はこれまでの政治史的観点の欠落を衝いた点で画期的意味をもった。だがその一方で、室町政権との関係に目が行き過ぎて、石母田氏いらい語られてきた黒田荘固有の歴史のなかに、この起請文を位置づける観点が今度はかえって薄らいでしまったようにも思える。ここでは太田氏の研究を踏まえたうえで、政治権力の間隙を泳ぐ地侍たちの、なによりも共同体のしたたかさに注目している。

## 3 観念の逆転

### i

名張住民の精神は古い時代から「東大寺の精神」として培われてきた。この精神にはおのれが「寺奴」（大仏奴婢）であるという観念が結合していた。そのような「東大寺の精神」は、ほんらい寺の中で



こそ最も強いはずであったが、それにもかかわらず、時代の経過とともに、そこではしだいに弱まっていった。そしてかかる趨勢とは逆に、在地の中でこれが強くなっていったものごとくである。

ところで黒田荘の成立には、寺が国衙（公権力）を荘域から排除することを必須とし、荘園を維持するのも、すなわちこの原則を厳守することである、と観念されていた。武家の権力に対しても、これを排除する原則は変わらない。このため殺害人、人勾引（ひとさらい）が発生しても、守護はその交名注文をもって荘の沙汰人へ連絡し、沙汰人が搦めとった犯過人を荘の境の外で受け取らねばならなかった<sup>(35)</sup>。当然荘のなかでは、武家の末端でさえ存在するのはゆるされない。平康兼は父の代に源平争乱に参加して源氏に忠節をつくし、関東御家人に列したが、そのために寺からは「一寺之大怨敵」とみなされ、身柄追放と所領没官の憂き目にあわねばならなかった<sup>(36)</sup>。住人道証は関東御家人と号し大番役を勤めようとしたため、その咎は軽からずと「道証并所従等之住宅」を焼き払われ、作田を點定されたのであった<sup>(37)</sup>。ところが荘内に悪党が跳梁して押さえが利かなくなるにつれ、寺はかかる原則をみずからの手で崩していく。弘安年間（1280年代）になると「雖為本所一円之地、本所之沙汰難治之時、武家直可召取之由被下 院宣者、承前不易之例也」とみずから述べ立て、武家警察力の荘内導入を中央政府（朝廷）に要求するにいたる<sup>(38)</sup>。

## ii

これにたいして荘園住民は外部勢力（公権力）の導入、入部に反対の姿勢をあらわにし、この姿勢を強めていった。「荘園」共同体の危機が進行するにつれて、強く外部勢力が入るのを拒むようになっていった。鎌倉時代の前・中期までは見られなかった住民のこうした意思が、嘉暦二年（1327）になると歴史の表面にはっきりあらわれてくる。悪党追捕のため武家の御使・地頭御家人が郡内（黒田荘内）に入部しようとしたとき、百姓らは次のように寺へ訴えた。

黒田百姓等申 右子細者、武家御使、地頭御家人、郡内令入部、家内可焼拂由、其間候、事実候者、作麦等馬かひ一被踏煩候上者、御年貢・

御公事等、可闕如仕候哉、且百姓等歎、不可過之候、為御寺御計、百姓等安堵仕之様、預御成敗候者、可為恐悦候、恐惶謹言、（後略）<sup>(39)</sup>

武家の役人どもが荘内に入れば、家は焼き払われると聞いている、作麦などは馬に喰われ踏み荒らされるだろう、だから百姓が安堵するように御寺のお取り計らいを願いたい、と百姓らは寺に要求したのである。また元徳二年（1330）には、名張郡内の大江一族が一門東西に馳走して、悪党追捕のために入部した武家使者を退去させようとした。だがうまくいかない。すると一族は濫妨の輩（悪党）を追放したうえで、寺には「（武家）使者入部之時者、被下御寺御使於堺、可被加御問答候」と請願し、寺の「御使」立ち合いのもとでの、外部権力の退去をもとめた<sup>(40)</sup>。大江一族にとって外部権力が荘内にはいるのは、「一族之佗僚、御領牢籠、只此事候」というべき大問題であった。わたくしたちはここで外部権力にまつわる「荘園」内部の寺と住民の姿勢が、鉄状の線をみせながら逆転しているのに気づくのである。つまり当初は東大寺が外部権力の入部あるいは介入を厳重に拒んでいたが、鎌倉後期からはすすんでこれの導入をはかるようになる。そしてこれとは反対に住民は外部権力の入部を拒否するようになるのである。

## iii

先の永享十一年（P 3 r）・十二年の一揆起請文は、これだけを孤立させて観るべきではない。如上のような寺と住民の外部権力に対する、姿勢の変遷の脈絡の中に位置づけられるべきなのである。住民が守護入部を回避してくれた寺門に、子々孫々恩を忘れ申さずと誓ったのは、鎌倉後期以来の寺と住民の觀念の逆転から由来するものであった。すなわち住民主導の「地域」共同体（「村落」共同体の発展進化した共同体）が形成され、ここを中心に全住民生活が回り始めれば、住民にとっての脅威は外枠だけを残す「荘園」共同体ではもはやない。むしろ実効性をもつ外部の武家権力に外ならなかったのである。中世後期の封建権力が「地域」共同体を押し潰すかたちで迫ってくれば、かれらは寺がとくに忘れた公権「不入」の精神（東大寺の精神）をみずからのものとして逆手にとり、抵抗の論理に切り替えた。

封建権力が全国規模で諸権力の統合をはかれば、これに呑み込まれまいとする名張住民は、奇妙なことに「地域」共同体の主導のもと、「荘園」共同体へ回帰していく図式をみせることになった。

荘園制下の民衆のこうした観念は黒田荘だけのものではない。山城国一揆の時にも見られた。この時の土豪地侍が出した要求項目に「本所領共各可為如本」というのが盛られたのには<sup>(41)</sup>、たんに旧勢力の興福寺が（年貢減免闘争の相手として）組みやすいからというのではなく、「荘園」共同体の内部に民衆にとっての積極的な可能性があったから、とみるべきだろう。

#### 4 「村落」と一揆の重層構造

##### i

中世後期の地侍一揆はかならず百姓の「村落」共同体を基礎に据えていた。これは永享十一・十二年の一揆起請のとき、万一「地下百姓」が逃散訴訟をくわでてることがあっても、契約の年貢運上は未進懈怠なく運上する、と地侍が東大寺にむかって約束しているところに窺われ（前掲P3r史料第6項）、また山城国一揆のとき国人地侍の集会のかたわらで一国中の「土民等群集」しているのも、かような共同体の存在を想定させるに足るものがある<sup>(42)</sup>。さらに言えば、地域防衛のため結成された戦国期の伊賀惣国一揆の掟書<sup>(43)</sup>第二条に「国之物共とりしきり候間、虎口より注進仕におゐては、里々鍾を鳴、時刻を不写<sup>(ママ)</sup>、在陣可有候、然ば兵糧矢楯を被持、一途之間虎口不甘様に陣を可被張候事」とあるのも、百姓の共同体の存在を示している。条文の「国之物共」は前衛の「虎口」を守る侍分である。そして彼らから敵襲の連絡を得たら、里々の鍾を突き鳴らして、ただちに在陣するのは百姓村民であった。かれらは兵糧や武器を用意して虎口を固めねばならなかった。第三条によるとそれぞれの陣（「在々所々」とあり）では指揮官（「武者大将」とあり）を指定し、百姓村民（「惣」とあり）はその指揮に従うものとした（「其下知に可被相随候」とあり）。こうした一揆体制の軍事編制には、二つの階層が合わさって一つの体制となる、そうした構造的な重層性が内蔵されていたことをよく表している。

##### ii

土豪地侍が地域を基盤にして封建権力と対峙し、一揆の形をとって一定の政治交渉をし、あるいは実力で対決できるようになったのは、悪党の時代の地侍にはみられない大きな進歩である。悪党時代にはかれらは「村落」に基盤を置くことができず、つねに貨幣経済にもまれながら浮動しなければならなかった。悪党はバラバラに個人の欲望実現のために武装化した現象である。したがってかれらはみずからを結合させ、社会的に組織することができずにいた。一方地侍の段階になると、実際には他族を含むものの、姓を同じくして「同名中」なる擬制的同族集団をつくり強固な結束をはかった<sup>(44)</sup>。これは独立農民とのあいだに、支配・被支配の熾烈な階級関係を取り結んでいることによる。結束する地侍の下には労働力、生産物、貨幣などの多様な地代を、あたうかぎりおのれの手元に留め置こうとする、抵抗する「村落」農民がいたのである。かかる階級関係が形成されてはじめて、「悪党」はバラバラな武装民の状態から土豪地侍へと脱皮したのである。この理屈をさらに敷衍すれば、この熾烈な階級関係があるから、土豪地侍の一揆化も現象しえた、とも云えるのである。独立農民からなる「村落」が共同体であることによってのみ、在地武士のいる村は（階級支配の対象としての）「所領」となりえたわけで、かれらは、それぞれがこれを基盤にして一揆体制をつくっていたのである\*。

\* ここで想い起したいのは、封建領主制を実現する必須の要件が経済外強制（用水、山野の入会、祭礼その他あらゆる村落の規則）にあるということである。経済外強制とはいわば村民の在地生活のすべてを縛る共同態規制に外ならなかった（大塚久雄「共同体をどう問題とするか」『世界』一九五六年三月号・四月号、のち『大塚久雄著作集』第七巻、岩波書店、文庫版『共同体の基礎理論』岩波書店、二〇二一年所収）。つまり封建領主制の「所領」は独立した意志をもつ農民からなるのであるから、その内部には共同態規制を機能させる「村落」共同体がなければならぬ。「村落」共同体の枠組みが存在せず、共同態規制がはたらかないところには、領主支配はそもそも成り立ちえない。鎌倉期の悪党は

そのような領主支配の前提となる「村落」から無縁の状態に置かれていた。そして中世後期になってようやく、かれらは小規模ながら村を「所領」にすることができたわけである。ただしその「所領」となりうる共同体は一面で領主の支配に抵抗する自治の橋頭堡でもあったことを忘れてはならない。「所領」が自治と抵抗の共同体から構成されているのだから、かかる在地の構造に足を置く一揆体制が領主層と農民層の重層構造をとるのは必然であった。

## 小括

14・5世紀。社会の溶解と混沌のなかで、共同体は弱体化するのではなく、かえってあたらしい力を発揮する。新興の土豪地侍が主導することで、「村落」共同体はより拡大した「地域」共同体へと変容した。そこには「地侍」と「村民」のふたつの階層が包蔵されていた。南北朝期にはこの共同体は北伊賀の地侍と連合し、国の守護停廃の運動をおこした。室町期には名張一郡の一揆が生まれ、守護入部を回避した寺門の計略に、子々孫々感謝して年貢運上その他を起請文でもって約した。

永享十一年・十二年の地侍の起請文に見える住民の動きは、アジア太平洋戦争後間もないころの、住民が敗北したのか、それとも前進したのかといった議論から、室町幕府の政治情勢と関連づけた議論へと深められ、おおきく実態解明がすすんだ。だが、一面で幕府政治に目を奪われるあまり、ほんらいの特殊黒田荘における共同体のありかた、その変容との関係からみる視角はあいまいになりがちであったと思われる。

東大寺は国衙をはじめ外部権力の入部をもともと厳しく拒否し、なかの住民でも外部権力につながる者（鎌倉御家人）であればこれを追放した。だが、鎌倉後末期になると悪党追捕のため、寺はすすんで公権力の導入をはかるようになる。すると今度はこれとは逆に、住民が公権力導入にはげしく反対するようになる。

東大寺の姿勢の変化には「荘園」共同体が強盛であった状態から、これが崩れだすにいたる事情があった。寺はこの事情に対応して姿勢を変えたのである。そしてまた「村落」共同体は弱い状態から強い状態へ変化をとげる。この結果、外部権力が入部

することで課役を懸けられるような事態を避けようと、外部権力の導入に反対し、崩れかかった「荘園」共同体を防護壁にしようとしたのである。

寺が「荘園」共同体を放棄し、住民がこれを守ろうとする、こうした観念の逆転現象には中世後期の戦乱のなかにおける、「村落」共同体の主体性があらわれていた。かれらは「村落」共同体を強め、「地域」自治の共同体にまでその性格を高めても、武家の権力を前にしては、「荘園」共同体に回帰する。そうするのが政治的にもっとも賢明であることを知っていた。

## 四 中世共同体の終焉

### 1 商工民・農民・「惣」

i

「村落」共同体の成立は、すなわち自立する小規模農家の成立を意味することにほかならない。同様に専門化した手工業民の広汎な誕生をも意味していた。地侍と一揆の時代は商業経済が地域にひろがる時代でもあったのである。14世紀の列島の人口はこれまでの停滞状況から、うって変わって著しい向上線をたどる<sup>(45)</sup>。わたしたちはここに生産力の顕著な発展を推測することができるのである。村には「農民」以外に様々な生業の者たちがあらわれる。黒田荘では五十三人にのぼる者たちが有得銭（富裕税）の負担者として登場してくる<sup>(46)</sup>。かれらは「サイク（細工）入道」「カチ（鍛冶）」「カウソリカチ（髪剃鍛冶）」「イモシ（鋳物師）」といった手工業民であり、また「コムノカミ（権守）」「太夫」らの猿楽芸能民、あるいは高利貸らしき者たちであった<sup>(47)</sup>。

ただしこうした手工業、商業、金融、芸能などの徒は、中世前期にも存在しなかったわけではない。人が流動して社会が固まっていなかった低生産力の段階には、まったく「農業」の要素を持たぬ民（純粋の非農業民）は、遠隔地間の線の上を移動する、経済学でいうところの「前期的資本」<sup>(48)</sup>としての、交易者、特殊技術の工人、芸能民に限られた\*。しかもかれらが交通集落（宿・港湾）の長者であることはあっても、荘園の共同体内部に居住することとはなかった。

こうしたことを念頭に置くと、鎌倉末期（嘉元二

年・1304)に有得銭の負担者として、非農業生産者・芸能民が地域のなかにあらわれてきたのは、新しい歴史の段階を画すものとして注目されるのである。これまで農・非農未分離な雑業民であったものが、14世紀になって明確な手工業民・商業民の姿をとって歴史に登場してきたのである。そこには雑業から専業へと生業をはっきりさせるだけの、各種の社会需要が地域のなかに生まれていたことを認識しなければならない。商業の発展は封建制の晩期にはこれを突き崩すモメント（それは資本主義の萌芽である）として積極的に位置づけられるが、封建制の形成期にあってはこれの進展を阻害する要因（「歴史発展の合法則性」を阻害する要因）として否定的に評価される。けれども中世前期社会の孤独な旅人である遠隔地商人から、地域に根をもつ専業手工業民、商業民、芸能民へと、「前期的資本」の地位がとって代わられるのは、14世紀黒田荘の雑業民が長い停滞を打破ったことの象徴として評価すべきなのである。

## ii

雑業民（浮浪的な労働者）のなかから土地と結合する「農民」が広くあらわれたのは、商・手工業・芸能の専業民があらわれるのと、表裏の関係にある同一のプロセスであった。したがって「農民」の登場は商・手工業・芸能民のあらわれる、鎌倉時代後末期でのことであった。一定の土地と家族を持つ「農民」が出現すると、おそらく在地の景観は大きく変わったはずである。土地の神社・お堂では住民の寄り合い、講、あるいは祭礼が催され、村落「共同体」はそうした人々の集まりとなって目に見えて賑やかになっていった。これを別の角度から言うなら、（底辺民衆を含む）多くの人が動きを止めて土地に根付いて落ち着いた、その結果として、惣の「村落」（いわゆる惣村）があらわれたということである。同時に浮動する盗賊武士も土地に落ち着いて「地侍」になった（「地侍」という言葉じたいが、土地に落ち着いたさまをあらわしている）。かかる在地の動向が伊賀一国の一揆体制につながったことは先述したとおりである。

さて以上のことがらをつづめて言うなら次のようになる。ひとの動きが止まること、専業の商工民があらわれること、独立農民があらわれる（農業経済

が本格的に成立する）こと、下層労働者が土地に定着する（小百姓が出現する）こと、「村落」共同体が充実する（惣村を形成する）こと、これらの事象はいずれも同一の過程の諸側面である。それらが歴史的前提となって全住民の土一揆は起きた。そこで注目したいのが中世後期になると、金融の負債が個人問題ではなくなり、全住民の問題として捉えられるようになっていくことである。僧徒・神人（土倉・借上）らによる貸し付けと、「土地」担保差し押さえ（質取）は、個人間の契約であるから、これによる経済破綻は個人の経済破綻であった。ところが共同体内部での生産面の協力、生活面での隣人意識の強化などにつれて、在地にはびこる負債問題は債務者一人の「苦」ではなくなり、近隣の「苦」となり、さらに全住民の「苦」へと拡大した。「村落」共同体の問題になったのである。

全住民は「惣」の意識を足場に、地域全体の「苦」を除去しようとする。室町期に頻発する土一揆はまさにこのことのあらわれであった。村人は債務破棄（徳政）を要求して蜂起し、寺院、朝廷、幕府の諸権門とこれらに連なる金融業者を震撼せしめた。正長の土一揆で徳政を勝ち取った大和国添上郡の地域住民は、村の入口の疱瘡地蔵の大石に「正長元年ヨリサキ者、カンへ四カンカウニ、ヲキメアルヘカラス」と刻み付けた<sup>(49)</sup>。そこでは彼らが金融の「ヲキメ」（負債）を個人の問題ではなく「カンへ四カンカウ」（神戸四カ郷）の問題とし一揆につなげていたことを知るのである。

\* 新猿蓑記にある八郎真人の生態をみよ。そこには「八郎真人者商人主領也、重利不知妻子、念身不顧他人、持一成萬、搏埴（ツチヲウツテ）成金、以言誑（アザムキ）他心、以謀抜人目、一物也、」とある（『群書類従』第九輯・文筆部）。こうした詐欺・商略・暴力のアウトロー的性格をつきしたがえ、遠隔地間の交易に携わった者としては、このほか伝承ではあるが、都と奥州のあいだを往復して商売をする（その際に牛若＝源義経を平泉に送り届けた）京三条の金商人吉次、あるいは実在の尾張国知多半島の要津野間内海を根城にした長田庄司忠致があげられる。長田庄司は太平洋沿岸を舟で移動し、ものを商う「大徳人」であった（拙稿『「長者」長田忠致



について」拙著『中世日本を生きる』吉川弘文館、2019年、所収）。吾妻鏡にみえる佐々木秀義も中世前期特有の遠隔地往來の商人であったと思われる。秀義の母と奥州の覇者藤原秀衡の妻とは同母の姉妹であって、出は安倍宗任の娘であった。この血縁関係がもとになって、秀義はしばしば主君源為義の使となって、矢羽根になる鷲羽と良馬を求めて奥州へ下った（奥富敬之『天皇家と源氏 臣籍降下の皇族たち』吉川弘文館、2020年、93～94頁）。佐々木の者たちはあちこちの豪族に寄食して、住所定まらざる体であることも、秀義がたんに主君為義の使者ではなく、軍需品調達の商品民であったことを思わせるのである。

## 2 共同体成員の武装

### i

中世後期の「村落」共同体は徳政と土一揆に象徴される「共同と連帯」の組織となった。だが微細にみると、それは共同体成員の感情が即自的に一体同一であったということではない。「共同と連帯」は生産力の上昇が庶民生活をかならずしも向上させるものではなく、それどころか人の浮沈（階層分化）を激しくしたことによって生まれた、共同体のあらたな意識的な傾向であった。農民層の分解の側面が強まると、人は不安定に流動し治安は悪化していく。だが近世のように社会秩序を維持する統一的封建権力が存在するのでもない。権力は分裂して世は慢性的な戦争状態にあった。そんな中を生きる人間にとっては、浮沈と階層分化で一体性は失われているが、そうであればなおのこと「村落」共同体しか生命と暮らしを守る寄りかたはない。さればいくつもの困難を抱えつつも、中世後期の共同体は「共同と連帯」のための組織であらねばならなかったのである。ところで戦争と盗賊の脅威にさらされる地域住民が「共同と連帯」を確実に担保するには、全体レベルで武器を所持しなければならなかった。これはかれらが一揆を結成するとき、一揆内の「弓矢の沙汰」を禁じて「平和」を保障しあっているにもかかわらず、一揆の外に向けてはホブスの云うところの「万人の万人に対する闘争状態」にあらねばならなかったということである<sup>(50)</sup>。室町戦国期の戦争状況全体のなかで、共同体が有する歴史の

限界を示すものであった。

### ii

中世後期の「村落」共同体がつき従える、かような軍事的要素は、応仁の乱をはじめ大規模な戦乱がうち続くなかで、農村を戦争のための労働力源にしていっていった。都市の戦場で戦う軍勢は戦力を増強すべく、兵を農村から雇い入れた。このことによって南北朝期くらい世人の注目を集めるようになった「足軽」は量的に増大し、合戦の勝敗の帰趨を制するまでになっていった<sup>(51)</sup>。応仁の乱のとき傭兵隊長の骨皮道賢（細川勝元の配下）が使った五、六百人の「手衆」は一般に足軽と呼ばれた者どもで、かれらは洛中民家の放火や道路の封鎖など合戦の裏方、後方または周辺の攪乱の活動をしている<sup>(52)</sup>。こうした傭兵の出現は、ルンペン武者・武装民などの各種浮浪の徒が、農村から大量に生まれ、兵士材料となっていたことをものがたる。東寺の境内には馬切左衛門五郎なるものがあられ、寺内の公人、小者、力者、院内百姓を相手に足軽の募兵活動をしている<sup>(53)</sup>。馬切は遍照心院領のものである。そして彼が兵に募ろうとした「公人」以下の者は寺領農村から上がってきた武装民であったと思われる。浮き沈みの激しい「村落」共同体の成員は、さまざまな思惑で都市の寺院神社に出入りし、世間の情報を得つつ一獲千金の夢を追い戦場に身を投じていった。

## 3 共同体成員の傭兵化

### i

応仁の乱（応仁元年・1467勃発）は勝負がつかぬまま、敵対する双方の大将が死没し、文明九年（1477）には西軍諸将が帰国してようやく沈静化をみた。しかし南都では大乱の当事者畠山義就（西軍の将）の影響がのこり、東西両陣営に系列化した筒井、古市、十市らの衆徒国民（大和の土豪地侍）は依然として互いに勢力を争っていた。文明十一年（1479）奈良の情勢はにわかに緊迫する。この年の9月、10月と、東軍筒井順尊が眉間寺および東大寺転害、西方院山、稗田荘に軍事行動を展開した。すると西軍の古市澄胤はこれに備え奈良中に「群勢用」（軍勢用途力）を懸けた。ついで筒井も「色々事」（軍費調達）を各方面に申しかける<sup>(54)</sup>。軍事

的な緊張の高まりに応じて、彼らは足輕傭兵を雇い入れねばならず、そのための軍費をつくらねばならないのである。この結果奈良市中には足輕が溢れ、寺の僧までが「他国他所足輕二被取首」という事件が起き、「敵御方悪党其外盗人共道路二満々」というありさまとなった<sup>(55)</sup>。道路にあふれた足輕（敵・御方の悪党その外盗人ども）のなかに伊賀の者たちがいたことは当然考えられる。かれらは「伊賀衆」と呼ばれていた。長禄四年には根来寺と粉河寺の水争いに出張り、そこでの戦闘で「衆」のなかから討死をだしている<sup>(56)</sup>。

## ii

伊賀の者たちは自由な契約で雇われる傭兵であったから、意に添わぬ相手に従うことはなかった。興福寺の僧光秀と円秀は伊勢の寺領に下向する途中、東山中の上笠間住民がごとごとく「没落」（逃亡）して、笠間の伊賀衆が越智方に従うのを忌避しているのを目撃している<sup>(57)</sup>。このようにはじめは自由独立の伊賀衆であったが、やがて時の経過とともに特定の主を持つようになっていった。長享二年（1488）足利義尚が六角氏討伐のために近江へは行ったところ、「伊賀衆二百人」が六角の被官になっていたという<sup>(58)</sup>。また少し時代が下るが、永禄三年（1560）桶狭間合戦・義元横死後、今川氏の家臣岡部長教が織田方の刈谷城を攻めたがそのとき、かれは「忍の者」「輕卒伊賀の徒」を使い城將の頸を取っている<sup>(59)</sup>。伊賀の「忍の者」「輕卒」が大家臣の下に召し抱えられ、戦闘に従事していた様子がうかがえる。さてそれでは、伊賀衆の行動はどのようなであったのだろうか。多聞院日記天文十年十一月二十六日の条によれば、かれらは笠置城へ忍び入って房舎に放火し、そのほかの所々の小屋を焼いた。伊賀惣国一揆掟書の第五条をみると、

一、国中之足輕他国へ行候てさへ城を取事に候間、国境に從他国城仕候て、足輕として其城を取、忠節仕百姓有之ば、過分に褒美あるべく候、その身におゐては侍に可被成候事

とある<sup>(60)</sup>。これには伊賀国中の足輕が他国へ行つて城取をしていることが記されている。伊賀衆がみせた笠置城忍び込みは、上掲の「城を取事」の具体

的な容態に外ならない。足輕として雇われた彼らが、戦場で得意としたのは、夜陰に乗じて軍事施設に放火をし城を取ることであった。伊賀衆が戦争の裏方として「忍び」を業としていたのはまず間違いない\*。このほか上掲史料からは、他国へ出かけ城取にはげむ足輕が、国境を侵して築いた他国軍勢の城をとることを、一揆指導部から期待されていたこと、そして彼らが在村の身分としては「百姓」であって、「忠節仕る」城取りの褒美としては「侍」身分を与えられることになっていたことがわかる。ここでは伊賀衆が一揆指導部「侍」のもとに前もって編制されているのではなく、バラバラな集団で（つまり「衆」として）他国へ出向き「足輕」「忍び」として雇われていたことだけを注目しておきたい。

## iii

かれらの実態は正規軍として合戦する兵ではなく、正規軍の周辺に位置づけられた、特殊な戦闘技術を持つ兵であった。武家名目抄<sup>職名三十四下</sup>「忍者又稱間者諜者」の項で「伊賀国又は江州甲賀の地は地侍多き所なりければ、応仁以後には各党をたてゝ、日夜戦争を事とし、竊賊強盗をもなせしより、をのづから間諜の術に長ずるもの、多くいできし」というのはおおむね当たっているようである。

では伊賀の住民は特殊技術「忍び」をどのような条件のもとでそなえもつに至ったのだろうか。ここで示唆に富むのが、竹内理三氏がかつて提唱した中世荘園制における「土地の支配」と「人の支配」という二つの別個の支配原理についての所論<sup>(61)</sup>である\*\*。中世後期の戦乱はこの二つの支配原理に、ことさら強い作用を及ぼしたものと思われる。つまり戦乱の時代になると荘園住民は、寺の土地支配とは無関係に諸方兼属化（寄人・神人・房人・供御人・家人などになること）を活発化させたとと思われる。住民たちは寺（本所）からの人身支配が弱いのをよいことに（「荘民」としては年貢・公事さえ納めればよい存在である）、山岳寺社の武装した僧や修験者と交わり、房人・神人・山伏などになった。かれらは寺内境内に出入りし、合戦する悪僧仲間に加わることがおおかったであろう。それはあたかも平安末期の寺の寄人が大衆の嗽訴に加わったように、とくに組織性もなく個々人が寺の諸機関に結びついていた。

「忍び」の基本はあくまで無言・隠密裏に、敵の虚を突いて戦闘を遂行するところにある。こうした戦闘はもともと弓馬に練達する武家のものではなく、馬を使わない寺院の僧侶・山伏のものである。比叡山の悪僧、悪党は戦闘のさいに太刀に通を入れて勝つ呪文、隠形の呪文、弓に性を入れる呪文、合戦の悪日かえって吉日となる呪文、敵に殺害されぬ呪文をとこなえた。そしてこれらの呪とともに、四手三方払い、柄払い、腰車、八方払い、葉返し、緋力ケ、霞ヌキなどといった太刀、長刀、弓矢の操法を練磨していた<sup>(62)</sup>。忍者もおのれの姿を隠すのに摩利支天の咒を念じ、敵との戦闘に臨んでは九字（臨兵闘者皆陣烈在前）の印を結ぶ。かれらは僧・山伏と同様に声を出さずに、念じることで戦いに勝ちを得ようとした。寺院の悪僧・山伏と交わる伊賀の「足軽」「忍者」が、戦闘にさまざまな咒を唱えるのは、まことに自然であるとみるべきだろう。

\* わたくしはかつて、伊賀の住民が「忍び」を産業にしていたとは思わないと述べ、「忍び」を地域の防衛、封建権力との戦いの中で編み出された戦闘技術とみ、これをごく自然のうちに身につけた農村住民がいわゆる「忍者」であったと論じた（拙著『黒田悪党たちの中世史』日本放送出版協会、2005年）。この見解は住民がいつも「村落」共同体の中に身を置いていることを前提にした「忍び」「忍者」の捉え方である。しかし実際には人は村落の中にとどまっていたのではなく、傭兵となって大和その他の戦場へ出るものは多くいた。「忍び」は地域防衛のためや反権力のためだけではなく、上部権力に“商品”として販売するためのものでもあった。したがって、ここで前言を訂正したい。

\*\* 竹内氏の荘園制支配における二つの支配原理の発見は、荘園制というものと土地を介して支配を実現する封建制Feudalismとの違いを鮮明に剔出するもので、戦後（アジア太平洋戦争後）の学問の世界にきわめて大きな意味を有した。とはいえ戦後の中世史研究は在地領主制の研究視角が主流であったため、1960年代まではあまり顧みられなかったかのごとくである。ところが1970年代にはいると、網野善彦氏が「非農業民」の人間範疇を想定することで、これまでのよう

に土地を介しては見えてこない農民以外の民衆の実態を発掘し、中世社会像の豊かな再構成に成功した。おそらく網野氏は竹内氏の学説から「土地の支配」の下にある人々（農民）の、別の相貌（非農業民）を想定する方法を学び取り、ついには非農業の職人・芸能民の世界に目を開いていったのだろう、と考えるのである。余談であるが、わたくしがまだ大学院生であったころ、師である竹内氏は研究室に入ってくるなり、いきなり世に出たばかりの網野氏の『蒙古襲来』（小学館、1974年）をとりあげ「網野君の本はおもしろいな」と絶賛した。このときの竹内氏のやや瞠目した面持ちをわたくしは印象深く覚えている。今にして思うに、竹内氏はおのが学説の基礎となるところで、網野氏の発想と構想が通底していることを見てとり、大いにわが意を得たのではないかと、愚案を抱くのである。

#### 4 大名被官と無足人

##### i

天正九年（1581）伊賀一国の「惣国一揆」は織田信長の大军によって壊滅させられた。このとき名張の地侍・「百姓」の共同体も大被害をこうむった。わたくしたちはこの戦乱（天正伊賀の乱）をもって、中世の共同体の終焉を強く感ずるのである。端的に云うなら、これをもってほとんど生命を終えようとする東大寺の力と、それでもこれに依拠しようとする在地農村住民のしたたかな力が、同時に終わりを告げたのである。そのあとの名張住民はどのような編成をうけて近世社会へつながったか、あまりはっきりはしない。ただそれには二つのコースが想定できるであろう、とおもえるばかりである。

一つは「忍び」やゲリラの戦闘技術を保持する住民が、戦国いろいろのコースをそのままたり、下級家臣団（足軽・隠密）として近世大名のもとへ召し抱えられるコースである。すでに戦国末期には前述のように大名に被官化し、あるいは大名家臣に召し抱えられているケースがみられる。近世になると「天下諸侯、募伊賀甲賀土兵」と言われるように<sup>(63)</sup>、諜報活動の必要から諸大名の需要が高まり、リクルートされるケースがさらに多くなったと思われる。伊賀伊勢両国の大名藤堂氏が藩内土兵（地侍）の他国に仕官するのを禁じているのは<sup>(64)</sup>、土

豪地侍が土地から離れ、さかんに各地の大名のもとに赴いたさまを逆に物語っている。戦国いらいの地侍の被官化は、共同体の本質である「全体性」、すなわち住民の一揆的構成を弱める。それはたんに共同体の「全体性」＝一揆的構成を弱めるだけではない（この傾向だけなら鎌倉時代の「村落」共同体の内部にも地主制の発生とともに存在した）。大名被官化は上から降りてくる大名権力と連結し、人間一人ひとりを縦の線で組織しなおし、封建国家へと社会を再編する性質をもっていた。

もう一つのコースには藤堂藩の在村政策に組み込まれ、土地にとどまったまま「無足」という名の士分として権力に組み込まれ、村の支配にあたらされたことである。これが無足人制度である。宗国史の記述によれば、かれらは伊賀国主の城の管下に属す農兵で、俸禄なしで公用に供せられる。自分で一揃いの甲冑と一根の長槍をもち、大小の刀剣を帯するのを許された者たちで、別に郷土とも呼ばれた<sup>(65)</sup>。

伊賀における土豪地侍の戦いの顛末をみるに、統一権力の確立にむけての世の身分確定と、そのための兵農分離が、これまで一般に言われるように、もっぱら権力側からの施策であったと考えるのがほんとうに正しいのか、吟味することは必要であろう。伊賀国のばあい共同体内の土豪地侍（戦闘技術をもつ「百姓」も含む）が、そのまま封建権力の末端に連なる現象は、さきに述べたように織田信長の攻撃を受けるまえから既にみられた。要するに上から兵農分離が強行されたというより、下から自主的に武力を有つ地侍が離村することで、共同体の軍事的要素のかなりの部分は消去されていったのである。その一方で、「村落」共同体の重層構造（侍分と百姓の重層構造）は近世の支配体制にそのまま活かされた。離村しなかった侍分（在地に残された軍事的要素）を無足人とし、農民を抑え込む機構につくりかえたのである。この部面（無足人制度）では、兵と農の未分離の状態がそのまま維持温存されたともいえる。わたしたちは近世移行における兵農分離が、中世的共同体の終焉と結びついて、下からのコースをたどってなされたこと、また中世的共同体を権力側が換骨奪胎することで、農民支配実現の装置につくりかえたことを知るのである。

## 小括

鎌倉末期になると人は動きを止めて土地に定着し、それぞれの生業を成立させる。鍛冶などの手工業民が有徳人となって現れてくる。農業を生業とする「農民」が成立するのもこのころである。こうした事象は生産力の上昇によるものだが、それは一方で激しい浮沈と分解のために治安を悪化させ、共同体秩序の不安定化を住民にもたらした。そのうえ中世後期の戦乱期には、秩序と平和を維持する公権力が存在しないから、共同体を維持しようとする住民は、こうした歴史環境のなかで、かえって結束を強める。

個人問題であるはずの土倉借上げの負債を「村落」共同体全体の問題とし、一揆してこれをはねのけ徳政を幕府・権門からもぎ取り、あるいは戦乱盗賊の脅威に対しては共同体として自衛武装する。だが武装はほんらい平和の実現維持のためでありながら、共同体の外に向かっては「万人の万人による闘争状態」を現出しなければならなかった。

16・7世紀。「忍び」の特殊戦闘技術を身につけた者は傭兵となって共同体の外の戦場で活動する。こうした活動が前提となって、共同体成員から大名に被官化する者があらわれ、共同体の「全体性」＝一揆的構成はくずれだす。くわえて天正九年（1581）の織田の攻撃をうけた伊賀の共同体は決定的に弱体化した。戦国以来の被官化は近世大名への仕官としてもつづき、残った共同体の主成員は在村郷土「無足人」となって村民を管理監督する。こうした形をとって共同体は、封建支配の機構へと転じていった。

## むすび

純粹に農村に閉じ込められた「村落」共同体は長い近世をへて解体した。これによって出現した資本主義は交換価値を基礎とする生産を前提とすることによって、人間の営みを「社会的個性」生成の源泉とし、人間の力能をおおきく発展させた<sup>(66)</sup>。こうした視角からみると、資本主義の成立とは伝統と身分・格式で縛りつけられた共同体内部の諸個人を解放することを意味し、自由な力能を発揮する「個人」を開花させたともいえる。しかし反面では共同体の解体による土地からの分離で、諸個人は所有喪



失の労働者となった。かれらはもはや仲間がいる協働者でもなければ、奴隷や農奴と云う人格的關係でおのれの生存の源を土地におくわけでもなく、また生産用具を所有してもしないことになる。

そうした個人に残された唯一のなしうることは、ゲールドも指摘しているが（注66. 39-40頁）、自己のただ一つの財産である自己の人格から、自己の労働力を分離することであった。ようするにおのれの労働を「自分」から切り離して、市場で売ることである。こうして自分の労働が自分のものではない（自己疎外された）ところの賃金労働者が生まれる。個々に孤立する賃金労働者が貧困にあえいでいるのは、共同体がはげしく解体していく、資本の原始的蓄積段階だけのことではない。きわめて今日的な問題でもある。こうした個人の窮状は自己責任論では解決にはならない。個人個人を結びつける、新たな自己実現を保証する共同社会のシステムのなかでのみ、それは克服されていくのであろう。共同体論の探究はますます重要になっている。

(26) 貞和三年正月二十二日年預五師実専書状土代、『大日本古文書』東大寺文書之十一・188号。いま必要な部分を掲げる。「先々在国庇弱守護代等、不能退治之間、仁木典厩（義長）勇士之名望世以無隠之上、相兼勢州之管領、旁以依當退治之仁、就申補伊州守護職、兩度既乍被下罪名治定之御教書於守護方、改以前之御沙汰、被仰江州守護之条、雖相似嚴密之御沙汰、被編寺社之護持、猶有御許容凶徒連署之奸訴之故歟、如風聞者、件惡党称守護停廢之沙汰用途、一国平均致棟別・段別之催促、公方之烈訴及数百人云々、倩案事情、桃井駿州代官入部之時、及北方惡党等致合戰之刻、當国住人河合新左衛門尉不知実名属守護之手雖抽軍忠、於守護者得替、至惡党者誇無刑罰之御沙汰、服部一族等悉発向河合左衛門尉之宿所、焼拂住宅以下了、公方之御沙汰者每度不嚴密、凶徒之惡行者不可廻時刻之条、先事不忘歟之間、今度又依張本交名人等之秘計、国中大略無殘加停廢之署云々、加之被沙汰付黒田庄下地於寺家之初者、速任先例可随寺家所勘之由雖捧請文、伺い北方御沙汰之時儀、不從寺勘抑留乃貢、剩数十人加守護停廢之署云々、（以下略ス）

- (27) 暦応二年十二月から暦応三年四月の間に補任（佐藤進一『室町幕府守護制度の研究』東京大学出版会、1967年）。
- (28) 欠年東大寺衆徒群議事書土代、東大寺文書之十、134号。
- (29) （建武三・延元元年カ）正月八日足利尊氏書状、尊勝院文書、『大日本史料』六編之二・946頁。
- (30) 注（26）に同じ。
- (31) これ以後も太平記には名張住人の南朝での活躍がみられるが（巻十八「瓜生挙旗事」）、武家方石塔頼房に従って戦闘に従事する「名張が一族」もみられる（巻第三十五「尾張小川、東池田が事」）。
- (32) 建武二年五月日東大寺衆徒申状土代、早稲田大学大学院文学研究科『東大寺文書伊賀国黒田莊史料』199号。
- (33) 永享十一年七月廿二日東大寺八幡宮領起請文、三国地志卷百十一。同十二年（1440）、出作新莊地域—このころは名張郡とよぶ—の住民がほぼ同様の起請文を書いて寺に提出している。三国地志卷一一一。
- (34) 太田順三「莊園と『地域的一揆』体制—石母田正著『中世の世界の形成』をめぐって—」佐賀大学教養部研究紀要第12巻、1980年。
- (35) 嘉禄元年五月三日関東御教書案、村井敬義本東大寺文書坤、鎌倉遺文第五巻・3376号。
- (36) 元久二年七月日東大寺僧綱等連署寄進状、東大寺文書四ノ五、鎌倉遺文第三巻・1558号。
- (37) 欠年七月廿日道証書状案、東大寺文書四ノ五、鎌倉遺文第九巻・6167号。
- (38) 弘安五年十月日東大寺衆徒等申状案、東大寺文書四ノ一、早稲田大学大学院文学研究科『東大寺文書伊賀国黒田莊史料』Ver 2・143号。
- (39) 嘉暦二年四月十日伊賀国黒田莊百姓愁状、東大寺文書四ノ七、鎌倉遺文第三十八巻・29806号。
- (40) 元徳二年閏六月日伊賀名張郡内一族等重申状、東大寺文書四ノ四、鎌倉遺文第四十巻・31130号。
- (41) 大乘院寺社雜事記文明十七年十二月十七日条。なお、これよりも前（15世紀前半か）、高野山領志富田莊の百姓らは「公方御公事」（守

護の課役)を拒むため、「止耕作可令逃散」とかたく寺へ申し入れ、ためにこれを受けた寺は一荘の守護課役の御免をこうむりたし、と書状をもって守護方と交渉している(高野山文書之五、七五四号、欠年高野山年預書状案)。この事象も中世後期の荘園制下の民衆が外部権力(幕府守護権力)の侵入を回避すべく「荘園」共同体へ回帰する図式とみてよい。

- (42) 注(41)に同じ。「今日山城国人衆会、上ハ六十歳、下ハ十五六歳云々、同一國中土民等群集、今度兩陣時宜為申定之故云々、可然歟、但又下極上之至也、」とあり。
- (43) 神宮文庫蔵・山中文書、『中世政治社会思想』上、日本思想大系、岩波書店、1972年、413～4頁。
- (44) 伊賀の隣国近江甲賀では地侍の「同名中」が典型的なかたちで出現している。『甲賀市史』第二巻〈甲賀衆の中世〉甲賀市史編さん委員会編、2012年。
- (45) 注(3)前掲書(岩波講座 日本経済の歴史1 中世)、7頁。
- (46) 嘉元二年正月十四日黒田荘有徳人交名注進状案、東大寺文書四ノ七、早稲田大学大学院文学研究科『東大寺文書伊賀国黒田荘史料』Ver 2・225号。
- (47) 樋口州男「伝承に残る荘園の歴史—黒田荘と長者伝説」(同氏『中世の史実と伝承』東京堂出版、1991年所収)。樋口氏はこの論文で有得人の出現の背景を商業経済の発展にあると指摘する。商業経済(非農業経済)の発展期には黒田荘全体の構造的再編が、惣寺一神人(有得人)を軸に行われ、これから排除された政所系列の荘官・私領主が悪党としてあらわれる、とみる。寺は悪党を封じ込めるための意識の装置として、荘内一ノ井を舞台に「道観長者」伝説を案出した。それは在地における有得人と悪党の競合・敵対の関係がベースとなっており、悪党は長者に仮託されているから、長者は「滅びる長者」でなければならなかったという。とはいえ、有得人も悪党と階級を同じくする者たちであり、彼ら有得人の下にも駆使され呻吟する民がいる。かれらと有得人との間にも「滅びる長者」は形成される土壌はあったという。樋口

氏の論説にはとくに共同体の言及は見られないが、「長者」の出現する転形期農村における共同体外の、新しい人びとの意識と思想を考えるうえで、すこぶる示唆に富むものがある。

- (48) 大塚久雄「いわゆる前期的資本なる範疇について」『経済志林』8-2、1935年、同「前期的資本の歴史的性格—流過程から利潤を抽出する—」『帝国大学新聞』1946年8月13日号、ともに『大塚久雄著作集』第3巻、岩波書店、1969年、所収。岡田与好「前期的資本の歴史的性格」『西洋経済史講座』[I 封建制の経済的基礎]、岩波書店、1960年。
- (49) 永島福太郎「負い目」鎌倉遺文第三巻月報。
- (50) 近江国菅浦惣荘の住民は七八十の<sup>としより</sup>老<sup>としより</sup>どもまで弓矢を取り、女性たちも水を汲み、桶を担いで、隣荘大浦住民と山野を取り合い、戦闘をまじえた。文安六年二月十三日菅浦惣荘合戦注記、菅浦文書上巻628号。
- (51) 一条兼良は樵談治要で、合戦勝敗の帰趨を制するまで増加した足輕について、以下のように苦々しい思いを述べている。「此たびはじめて出来る足がるは超過したる悪党也、其故は洛中洛外の諸社、諸寺、五山十刹、公家、門跡の滅亡はかれらが所行也、かたきのたて籠りたらん所におきては力なし、さもなき所々を打やぶり、或は火をかけて財宝を見さくる事は、ひとへにひる強盗といふべし、かゝるためしは先代未聞のこと也、是はしかしながら、武芸のすたるゝ所にかゝる事は出来れり、名有侍のたゝかふべき所を、かれらにぬきゝせたるゆえなるべし、されば随分の人の足輕の一矢に命をおとして当座の恥辱のみならず、末代までの瑕瑾を残せるたぐひも有とぞ聞えし、いずれも主のなきものは有べからず」(『群書類従』第二十七輯雑部)。
- (52) 鈴木良一『応仁の乱』岩波書店。
- (53) 東寺廿一口方評定引付文明三年正月二十五日条。馬田綾子「中世都市と諸闘争」『一揆3 一揆の構造』東京大学出版会、1981年。
- (54) 大乘院寺社雑事記文明十一年十月六日条。
- (55) 大乘院寺社雑事記文明十一年十月二十三日条。
- (56) 大乘院寺社雑事記長祿四年五月二十五日条。
- (57) 大乘院寺社雑事記延徳元年十月二十七日条。

- (58) 蔭涼軒日録長享二年三月廿二日条。
- (59) 『改正三河後風土記』「岡部長教刈谷城責並鳴海城軍事」原本未見。石川正知『忍の里の記録』翠楊社、1982年、83頁。
- (60) 山中文書『中世政治社会思想』上、日本思想体系、岩波書店、413頁。
- (61) 竹内理三「莊園制と封建制」『史学雑誌』63編12号、1953年。のち同氏『律令制と貴族政権』第Ⅱ部、御茶の水書房、1958年所収。
- (62) 平泉澄『建武中興の本義』至文堂、1934年。  
新井孝重「楠木氏の出自—猿樂集団との関係—」『楠木正成のすべて』新人物往来社、1989年。
- (63) 宗国史卷之六 本譜第六「大通公一」寛永十四年是夏の条。
- (64) 宗国史卷之六上に同じ。
- (65) 石川正知前掲書114頁。
- (66) キャロル・C・グールド（平野英一・三階徹共訳）『「経済学批判要綱」における個人と共同体—社会存在論の哲学的研究—』合同出版、1980年。

